

咲かせよ 舞台芸術の花、 地域から開け 世界の パノラマを！

劇団文芸座

1948年に富山市で結成されたアマチュア劇団。1981年サントリー地域文化賞受賞。民話劇に始まり、日本および海外の現代劇、イブセン、チェーホフなどの古典的名作劇からミュージカルに至るまで多彩。1977年にアイルランドのダンドーク国際アマチュア演劇

コンクールで英語圏外では初めての最高賞を受賞した。このことを契機に、18カ国31都市で公演活動を展開。文芸座が中心となり、富山県芸術文化協会が2008年に立ち上げた「とやま世界こども舞台芸術祭」は世界三大アマチュア演劇祭のひとつとなっている。

劇団文芸座 <http://www.bungeiza.com/>



地域文化のリーダー

地域文化の担い手の中からリーダーを探し出すのは、難しいことではない。ただそのリーダーから話をうまく聞き出すのは、実は厄介なことの上ない。すべてに一言あるか、あるいはすべてが「自己流」の話し方になる。色々な地域文化を見てまわるにつれて、地域文化のリーダーは孤高の人となりゆくように、ある種のリーダーシップをダイクテーターシップと紙一重の所で発揮するのだと思うようになった。だからその人のリーダーシップは閉じた地域の中でのみオールマイティで、しかも次世代には受け継がれない。タテにつながらず、ヨコに広がらず、とても息苦しい。話は常に「あなたには分らんじやろうが」というその人の「分らん奴に話す」という上から目線に

辟易しながら進んでいく……。

小泉博さん。富山の「劇団文芸座」の代表で、「富山県芸術文化協会」（芸文協）の名誉会長で富山の芸術文化人のトップという存在。昨年九月、「モダンダンス・ガラ・イン利賀二〇一四」にて、三度目の出会いを果たした。利賀と言ってもモダンダンスと言ってもピンとこない向きが多少ろう。富山から車で一時間半、山道をぐるぐるまわりながら登りゆくと、やがて人家も見えなくなり、山また山で大丈夫かと不安がよぎる中、突然目の前がパノラマ状に開けると、山間盆地のような所に、合掌造りの建物などが建つ不思議な空間にたどりつく。ここが舞踏、そして舞台芸術で日本中はおろか世界的にも有名な利賀芸術公園なのだ。そこに地元の富山はもとより、全国からさらに海外から実力ある現代舞踏のグループが集結して、秋の一日、新利賀山房で、



標高1000メートル級の山々に囲まれた利賀（南砺市）。非常に急峻な渓谷にあり、アクセスが困難な地として知られる。



舞台狭しとばかりに踊りまくる祭典が幕をあけるのだ。

その主催者の一人として、小泉さんは現れる。この人はいつも変わらない。自然体で話も分りやすい。数々の難局を乗り越えて来て現在がある筈なのに、それを気どらせない。だからと言って昔がたりが嫌いなのではない。でもおハコの話をそうと思わせぬオリジナリティが常にある。そうか、とある時気がついた。小泉さんは、同じ演目をくり返していても、一回一回がそれぞれ二度と作れぬ舞台であるように、相手をしかと見定めながら一期一会の気合で語るのだろう。だからいつ聞いても同じ話でもオンリーワンに聞こえるのだ。さすが演劇人！

地域からの国際化とは

利賀芸術公園・新利賀山房で会うの

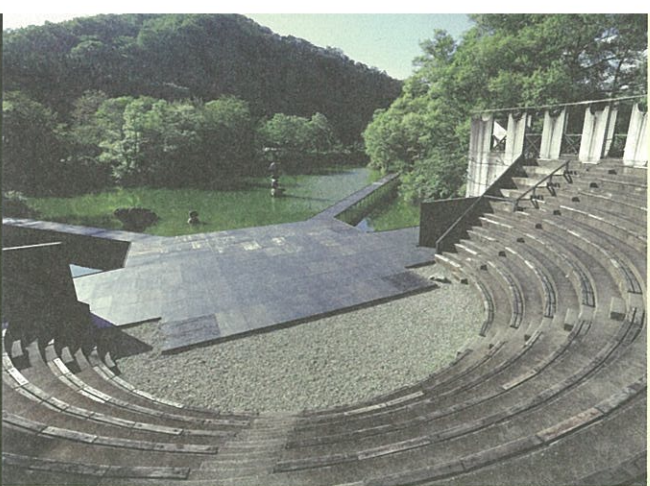


劇団文芸座代表の小泉博氏（写真中央）。1972年の富山県芸術文化協会設立に尽力。夫人で文芸座の看板女優の小泉邦子氏（左）と文芸座事務局長で芸術文化協会専務理事の舟本幸人氏（右）。

は、二〇〇三年の「ワークショップ『地球が舞台』in利賀」以来だから十一年ぶりのこと。一時期は衰退の兆しもあったが、今、利賀は静かにその存在感を再び増しているようだ。二〇〇三年は、利賀山房でピーター・バラカンが個性と個性が触れあえば、国境は関



富山県利賀芸術公園内にある新利賀山房。日本最大規模の合掌造りの民家を改築した劇場。設計は磯崎新氏。



野外劇場。1982年に始まった「世界演劇祭利賀フェスティバル」のために建設された。古代ギリシャの劇場を原型とし、舞台背景に山や池を活用している。

求められる アーカイブ化

さて一九九八年は「地域は舞台 in 高岡」で、富山と世界を語るシンポジウムが開かれた。前年、突如として地



「全日本地域選抜『モダンダンス・ガラ・イン利賀2014』。小泉氏が総合プロデューサーを務める「とやま舞台芸術祭2014」の一環として、3年に一度開催。

係ないとの主旨で「自然体で異文化に触れる楽しみ」を語った。それをうけて、福野町（現・南砺市）の担当者からトリニダード・トバゴの民俗楽器であるスチール・ドラムが地域の子どもたちに定着化した模様を聞いた。地域文化が国際交流につながるダイナミクスをそこでたつぷりと味わうことになったのだが、「すばらしい」と思うと同時に、寂然とせぬ気分も残った。どうしてだろうか。

極小単位の富山のある地域と最大規模の外国とが直接結びついた時、果たして富山県はいや日本はそこどう切り結ぶことになるのか。二段とぼしのままの交流では、深まりと広がりがかえって無くなってしまわないか。いやそれでも富山の中でも孤絶の地といえる利賀に今や文化芸術の拠点曲がりなりにも出来ている事実をどう見たらよいか、その疑問は、私の中の

域文化研究に飛びこんだ私は、何が何やら分らぬまま、地域文化はまず現場からという説得を受けて、このフォーラムに参加したのであった。何人かの発言者のうち、小泉博という人の発言が——いや内容は当時の私にはまだとてもついでいけなかったのだけれども——、しゃべり方として印象に残った。人の話を聞くオーラル・ヒストリーを始めて五年ばかりの私は、しゃべりのコンテンツよりもスタイルが気になつて仕方がなかったからだ。

それを今、追体験することが出来た。ちゃんと記録が保存してあったのである。アーカイブスの発想がこの頃からあったのに驚く。だがそんなことを言えば、あと知恵で知ったことではあるが、小泉さん自身、自らが関わったイベントや組織の記録を、面倒がらずにしっかりとアーカイブしている。『富山国際アマチュア演劇祭のあゆみ、一

時間軸で言うと、一方で二〇一二年に他方で一九九八年まで逆上る。

二〇一二年夏、軽井沢の建築家・磯崎新の別荘で彼と対座していた時のこと。東京では遂に終のすみ家を作らなかつた磯崎が、昔座付き作家ではなく、座付き建築家として親しくしていた、早稲田小劇場（後のSCOTT）の鈴木忠志が、最近もう一度静岡県から富山県の利賀に戻っており、自分にも来いと誘われているのだが、どうしたものかとの思案顔。えつとばかりにこちらには驚いた。利賀のアゴラの如き円形劇場や利賀山房などは、鈴木忠志の第一次利賀進出時代に磯崎が設計したものらしい。あらつ何と不思議なことだ。利賀の地域文化史へのもう一つの入り口が、目の前にいる磯崎との対話で開かれたのだから。またこの前後、磯崎は実際に鈴木に誘いで久しぶりに利賀を訪れていたのである。

九八三―二〇〇四」とか『劇団文芸座50年のあゆみ』とか、年史的にこれだけちちつと編集刊行しているのは、なかなか無いことだ。

脱線ついでに言えば、アーカイブの思想と実践が、今「災後」の日本が「未来」を切り拓くために一番求められている。小泉さんは富山の地域文化のリーダーとして、早くからそれを黙々と実現してきたのだ。特に座談会形式で生き生きとディテールの再現を可能にしているのが、今読んでも臨場感あふれる記載として、シロウトの理解をも容易にする。それだけの細かい気の遠くなるような作業をくり返し行う中に、小泉さんのリーダーシップのあり方が浮かんできてる。確かにいかに組織を作り継続性を考慮したとしても、「ハレ」の日の有様はその日限りで、放つておけば雲散霧消して当たり前なのだ。大変だ大変だ遅れて申し訳ないと編集雑

記にホンネを明かしながら、小泉さんはアーカイブを通じて、地域文化の過去・現在・未来をつなぐことを怠らなかつた。そこに小泉さんのリーダーシップの卓越性を見ることが出来る。

富山から 世界への歩み

おっと、話は大きく脱線してしまつた。ここで九八年のフォーラムでの小泉さんの発言に戻らねばならない。当時の記憶をよびますとこの手のフォーラムにはめずらしく、けつこうシビアナホンネに迫る質疑応答がくり返された。司会の蛭山昌一が富山の地をよく知る人だけに、直球よりくせ球をパネラーに投げこみ、また吟遊詩人よろしく佐々木幹郎が天空からの発想で議論をまぜかえした。そんな中での小泉さんの発言は、自らのアーカイブ化された記憶の中から、妖球やビーンボー

ルの投げかう舞台なのだからと、自らもその雰囲気によりそいながらも、言いたいことを言つてのけていた。今、記録を読み返して、当時の私の印象が間違えていなかったことを確認できる。ここではこの小泉さんの発言を補いながら富山と利賀との地域文化発展のプロセスを紡いでいきたい。

まずはフォーラムでの私の疑問、ローカリテイがいきなりインターナショナルリティと結ばれたのは何故か。小泉さんの語りから、あの社会反乱の気分が残つていた一九七〇年代という時代性が決定的だったことが分かる。一九七二年にエポックメイキングなことが二つおこる。一つは教育委員会の過疎対策として、文芸座の「山村巡回公演」が始まり、プロではやれず都市部ではやらないことをあえてやつた。地味な苦勞を通して、民話劇が民話のふるさとに戻り新しい活力を得ると分かる。

つまり現場で力をたくわえたのである。もう一つは小泉さんも推進力になって富山県芸術文化協会が設立され、富山県の一流の様々な芸術家との交流が始まり、広範なエキスを吸収したことだ。ためた力に広がり深まりが出て来たのだ。

そしてそれが「都市と山村のかけはし」のスローガンの下に、芸文協主催で、一九七五年「利賀村大集会」となつて爆発する。まさに疾風怒濤の時代への突入に他ならない。その成果は二つ。一九七六年には早稲田小劇場を率いる鈴木忠志の利賀進出が現実化し、利賀はいつしか全国化して「演劇のメッカ」と称されるようになった。そして千波は万波を呼ぶ。一九七七年小泉さん率いる「文芸座」はアイルランドのダンドーク国際アマチュア演劇コンクールに出場し最高賞を獲得する。ここで何と一挙に国際化だ。

気配りの人

そうか、日本が知らぬうちに、富山は世界で知る人ぞ知る存在となつていった。利賀には世界中の一流のプロ劇団が集まり、「文芸座」のダンドークでの最高賞受賞を契機に、富山で次々と国際アマチュア演劇祭が開催された。国際演劇祭の裏方を担つた小泉さんのリーダーシップを支えているのは、継続性につながる気配りだ。作品の質は絶対に落とさない。しかししこりを残さぬために賞の数は増やす。帰国直前の外国チームに、彼等の奮闘が載つている新聞をまとめて渡す。大韓航空機事件の最中、ソビエトの国旗に何かされぬように夜間はおろすも、その近辺の国旗もおろして目立たぬようにする。入国に際しての特別扱いというわがままは許さない。金がないので自前のレ



全国から選抜された17のグループが競演。コミカルなもの(上)、和風のもの(下段右)、メッセージ性の強いコンテンポラリーなもの(下段左)なものまで様々。





開演前、普段は静かな山里に大勢の人が訪れる。富山駅、空港から利賀までこの日だけのシャトルバスを運行。



飲むという「大物」ぶりを発揮するタイプではない。一面でスゴイ人、他面でコワイ人と、今や文芸座と芸文協の両方で小泉さんの次世代を担う一人たる舟本幸人は言う。すべてが自らの実践と他者との交流とによってバランスよく彼の中になり立つから、いつも何がおきても柔軟に対応できるのだ。今や「つなぎわたす」ことが小泉さんに残された課題であろう。

新利賀山房での暗く黒い木造建築の中で、モダンダンスの演目が一つ一つ進んでいる。いつのまにやらあの鈴木忠志も客席と一体となっている。全国から選抜されたチームの競演である。まだ幼な顔が残る若い男女のダンサーの舞台裏や練習場での奇妙な言動を見るにつけ、あの黒い舞台で真剣な表情で飛びはね、所狭しとかけまわる今の姿とはまったく対照的だとの思いがする。「ケ」と「ハレ」の違いがこんなにもはつきりと出る利賀の場のもつ力は、大したものだと。富山へむかう帰りのバスの中で、寝不足と疲労のための寝顔がまたいい。ああ恐らくは、小泉さんはこうした演じる者の百面相のすべてを抱擁し愛しているに違いないと。その時確信した。そして、気がついた。利賀ははるかに遠い。けども小泉さんはこんなにも近い。また来る。そんな予感がした。



新利賀山房の内部。舞台は能舞台をイメージさせる。客席と舞台の間隔が近いのも特徴。

ストランを出すなどなど。筋を通しながら、アイディアの発揮で難題を解決していく手ぎわは見事というの他はない。今一つきらりと光る小泉さんのリーダーシップの源泉には、最初の井戸を掘った人への感謝を忘れないことがある。これこそ言うは易く行うは難い。行政のトップだった中沖豊・知事、地元メディアの深山栄・北日本新聞社長などへの謝辞をいつまでも忘れない。だからこそ富山県では、芸術文化人と行政とメディアが三位一体となって地域文化を国際化の中で育んでいったのだ。それは一時利賀を離れた戻ったSCOTの鈴木忠志に対しても同様だ。富山県に受け入れられぬ熊立ちを隠さぬ鈴木に対して、小泉さんは思うこともあつたろうが、常に利賀を最初に開いた功績をほめたたえるのだ。今回モダンダンスを見るかたわらで、小泉さんの話を何度も聞いた。ユーモ